

虚存

自己満足のために、と僕は答えた
それは本当だった
そしてそれがため
僕には書けなくなった
この幸福の中では

僕は目的を変えようとした
けれどもできるはずはなかった
目的を産み出すことなど
ましてやこの幸福の中から
逃げ出すことなど

そしてやっと納得がいったのだった
いわゆる「詩人」たちのおめでたさが
もちろん彼らは言うだろう
僕の目が閉ざされていると
それは確かに本当だった

だが、彼らが目を開いているのは
それは一体何故だろうか、と
僕は考えてしまうのだった
それは目的を変えるためではないか、と
僕は考えてしまうのだった

(1989.1.8)